
冒険者の心得その2耐えるべし！

三步

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険者の心得その2 耐えるべし！

【Nコード】

N3415Y

【作者名】

三步

【あらすじ】

雑用係兼裏方兼初級冒険者のペネリックスは神様からのプレゼントである特殊能力”アビリティ”を授かったが、アビリティの力は”耐久力”でちょっと地味だった。

次から次に襲いかかる面倒ごとから耐えに耐え忍ぶペンペン君の災難続きの日々がいま爆発的に加速する？どんな困難にも前向きに善処する(?) そんなおとぎ話です。

前作、「冒険者の心得その1 生きるべし！」のワールドガイドを作

るつもりでしたが思い切って作品にする事にしました（前作を読まなくても全然問題ありません）。

そのため、ちよつと説明が多いかもしれないませんが間違いなくペンペンは君は頑張ります！報われる日が来るかどうかは別ですが…。

前作より若干投稿期間が長めです、というか1日3回投稿を基本にしていた前作がおかしい？（笑）。

耐えながらの旅立ち(1)(前書き)

読んで頂いた方、感謝・感謝です。

耐えながらの旅立ち(1)

ペネンリックスが自分の名前だ。自分でも言いづらい名前だと思う。今までは大抵、愛称としてペネンと呼んでもらえていた。ここにくるまでは。今、自分は多種多様な亜人種の住まう”アートフィル”の世界では珍しく人間が支配している土地が多い大陸タダルにあるの国々の中の1つ、ルフィル王国の王都フィルガードにいる。自分は一応、冒険者の集うパーティーハウスの一つ”石の上にも三十年”の冒険者だ。栗色の髪で目立たない茶色の瞳をしている何処にもいる普通の男だ。特徴が無いのが特徴というのはややや自慢出来ない。少々気が弱いところあるのは生まれつきだろう仕方が無い。

自分はこのフィルガードで念願の冒険者になったはずだった。なんのコネもなく田舎を飛び出て来た自分に入れてもらえる冒険者パーティーハウスがあつて、大喜びしたのは約1年前の話だ。

「…なあペンペン、聞こえなかつたから、もーう一度言つてくれないかあ？」

ここのハウスで世話係をしているスルトさんが大きな声で問いかけて来た。怒りを隠さない程度に隠している(？)、そんな声だ。

「…えつと、…だから、…アビリティを…もらっちゃったかな…なんて(おべっか笑付き)。」

何故か怒りをインクリメントしてしまったようで、胸ぐらをつかまれた。

「はー？このアビリティ嫌いが集まるパーティーハウスの一員のくせにかー!!」

…言われると思った、だから夕べは言い出せなかったのにと思う。今日は新年を祝う祭りの翌日だ。ペネンリックスは夕べ神様らしきものから力をもらった事をようやく言えそうな雰囲気を見つけて相談したのだが…。

「ふん、で、アビリティはどんなんだ？」

「それが、よくわからなくて……」

「ハツヤツパリ！、夢でも見たんだろう！人騒がせな！」

「でも、左手にあった紋様陣が消えてるんです、使っても無いのに。」

「紋様陣は紋様術師が描く奇跡の力を秘めたものである。それをカードに書いてもらい買っておく。必要なときにそのカードを直接使ってもいいし、素早く使う事ができたりするように身体へ写す”実装”という事もできる。先日、パーティーハウス”石の上にも三十年”亭の冒険者総出のクエストで連れて行ってもらったときに”軽治癒（通称ヒール1）”を貰って左手に実装していたものが残っていたのだ。この紋様陣はSCM：モンスターや過去の遺跡に行くと思われる万能の力…をためないと扱える事が出来ないのが最近やっと実装できるようになったばかりだった。」

「この紋様陣は大変便利ではあるが、アビリティ持ちは”紋様陣の実装”が出来ないのはよく知られている、…アビリティの源、神の印が身体に描かれているらしいのだがそれが紋様陣を弾いてしまいうらしい。」

「高い金だしてやったのに無駄にしゃがって、自慢してんじゃねー！ー！」

突き飛ばされ転がった。

まわりの皆にスタンプリ天国！とか、裏切り者とか、ラブパワー注入？とか、言われて踏まれまくった、…もう慣れてしまった自分が怖い。」

「ここに来て毎日こんな事の繰り返しだ、なんの取り柄もない自分は日々雑用係兼裏方で1年のほとんどを過ごして来た。倒したモンスターは全部でゴブリン3匹、冒険者の生命線であるSCMも紋様陣が1回使用出来るくらいしか溜まっていない。先輩達のストレス発散用に稽古という名のサンドバックになる事も少なくない（ただし、強い冒険者になる為に嫌がった事はない）。」

「やめいー！」

スルトさんよりシブくて大きな声が響き渡った、パーティーマスターのグラングールドさんがこっちに歩み寄ってくる。熊のような大男のグラングールドさんが近づくと…正直それだけで怖い。

自分を立ち上がらせてから、こちらの顔を覗き込むように身体をかがめて、

「今日でクビだ…、皆に挨拶をしてから荷物をまとめて裏に来い。」
そういうと、グラングールドさんは奥に戻った。そうなる事は予想していたがすぐとは…、

言われた通りにして裏に向かうと、盾を手に持ったグラングールドさんが待っていた。何も言わずに歩き出したのでついて行く事にした…。

耐えながらの旅立ち(1)(後書き)

まだ前作の推敲中なのですが、…皆さんペンペン君をよろしく願
いします。

耐えながらの旅立ち(2) (前書き)

読んでくださる方、本当に感謝・感謝です。

耐えならがの旅立ち(2)

グラングルドさんに連れていかれたのは近くの森林公園だった。ここはとても広くてよく冒険者の訓練に使われることが多いところだ。グラングルドさんは林の中の開けたところにくると、振り向いて盾を構えた。

「餞別だ…稽古を付けてやる。こい！」

まあ予想はしていたが…。グラングルドさんは武器は持っていない。手加減をしてくれるのだろう。

「府抜けた攻撃をして来たら、こいつをお見舞いするぞ。」

グラングルドさんは右手を握りしめて拳を作り突き出して来た。あれでこの前モンスターの頭吹き飛ばしていたのを目撃したっけ…。

自分の武器のハンマーよりよほど狂気だよなあと考えながら身構えた。そう、自分の武器はハンマー、頭にウオーがついてない普通のハンマーだ。裏方作業によく使っていた。武器じゃないじゃん！と突っ込まれたら言い返しようがない。

ペネンリックスは気合をいれてハンマーを打ち出した。

「そんなお大振りで当たるか！」

弾かれて拳を食らう。

「小手先でどうするつもりだ！」

弾かれて拳を食らう。

「日曜大工か！」

弾かれて拳を食らう。

そんなエンドレスな感じでかなりの時間稽古を付けて貰った。

かなり疲れて来てはいるが…今まではこんな指導受けたことなかった。嬉しかった。ハンマーを無心で振るう。

かしん！

およ？いまの一撃は手応えが違った。

「何も考えるな！続ける！」

言われたとおり、ハンマーを繰り出し続ける。手応えが変わって来たのが手に取るようにわかる。

「調子に乗って力を入れるな！無心だ、無心！」

それからも延々と続けて、日がくれる頃まで相手をしてくれた。

夕方になって、きりあげるぞと言って腰を降ろしたグラングールドさんの近くに自分も座る。

「力に頼るな、小手先の技術に走るな、…ただ打てばいい、それだけをしる。」

そう言つて最後に小袋を渡してくれた。お金が入っている、こちらは文字通り饒別なのだろう。そしてくるりと背を向けてしっしっしと手を降った。

ペネンリックスは一言礼を言つてその背中に向けて深く頭を下げ、歩み出した。

向かう先は術師会館というところだ。今日は遅くなつてしまったので明日行くことにしよう。

—————

グラングールドを見つめます。

若者が歩み去ると、その大男はむくりと起き上がり一本の木に近づいた。その木には横線のキズがいくつもついている、一番上が一番新しい。その一番上のキズを愛おしそうに指でなぞる…。

近づく足音が聞こえて来た、2人の様子をずっと見ていた者がいたのだ。

「…すみません、追いつく前に行かれちゃって。」

その男、スルトは申し訳なさそうな声で話しかけた。

「ふふ、冒険者に向いてないと思つて別の道を選ばせようとしたのは間違いだった…。神様にそう言われた気がするよ。」

そう、彼らはペネンリックスの将来のことを思つていびつて追いつくことにしていたのだ。しかし、こちらの想像をはるかに超える雑

草魂の持ち主だった彼は、辞める気配さえ見せなかった。

「本当に似てましたね、息子さんに。」

大男は少しだけ眉間にシワを寄せた。アビリティを授かって冒険者として家を出た彼の息子はもうだいぶ長いこと連絡がない。

「心配してないさ、あいつは生きている……」

確信を持っているというよりも願望しているという声で返して来た古い友人の大男に……スルトは答えることが出来なかった。

……が、

「餞別、本当に少ししか渡さなかったんですね、給料も普通の半分も出していなかったのに。」

大男はニヤリと笑って

「いつか挨拶にでも帰って来たときに渡すさ。」
と少しだけ嬉しそうにつぶやいた。

耐えながらの旅立ち(2) (後書き)

ペンペン君は1回1不幸以上が基本です(笑)。

術師会館での災難（1）（前書き）

いつも感謝・感謝です。

術師会館での災難（1）

イキナリであるがペネンリックスは、がぶりと噛み付かれた…痛い！

「ペンペン君！」

マリアさんの悲鳴が聞こえた。

「だああ！」

左腕に噛み付かれたままモンスターを持ち上げて壁にタツクルする！

「ゲツ！」

うめき声をあげて口を離したモンスターの頭をつかんで床に叩きつける…モンスターは白目を剥いて動かなくなった。

「ハアハア…」

「ゴ布林まだ来るわよ！」

ペネンリックスは小さな人型モンスター…ゴ布林が近づいて来るのを感じながら、部屋の中に視線をめぐらす。武器になりそうなものがないか探したのだが長柄の箒くらいしかなかった。それでもなによりはマシだと掴み、そばまで来ていたゴ布林に突き出す！と腹部に深く食い込んだ。ゲツと呻いて身体をくの字に折ったゴ布林をみて箒を手放し、両手を握り合わせた拳を振りかぶり全体重をかけて後頭部に振り下ろすと、床に顔からめり込んだ。眼下のゴ布林が動かないことを確認してからマリアさんの方に視線を向ける。

マリアさんにもゴ布林が接近していたが、

「ただただだだ？」

と交互に突き出した手のひらに生まれた衝撃波を、連続でお見舞いしてた…すげー。

「くそ、武器を持ってくりやよかった。」

「それでもなんとかするんだから凄いわよ！あつ怪我は…やっぱり無いのね？」

ゴ布林に噛まれたはずなのに噛みあとも残っていないペネンリック

クスの左腕を見るマリアさんは呆れているようだ。

「防具が要らなくて安上がりよね。」

「メチャクチャ痛いんだから！…噛まれている間だけだけど。」
念のためと、トドメを刺してから部屋を物色する。

小剣とナイフを発見した。先ほどの箒の先を折り、ナイフをくくりつけ即席の槍にする。後、丸い椅子の座面を使って小盾を作る。

「器用ね。」

今いる部屋の入り口で廊下の様子を確かめているマリアが感心したように呟いた。

「冒険者の裏方を結構やってたからね、慣れてるんだよ。」

「へえ〜。あつそうそう！今後のことを確認しない？武器の準備も出来たことだし。」

建設的な意見を言われて同意した。

「だね。まず、現状を確認しよう。」

今いる所は術師会館の実験棟の何処かの一室、

建物の中はモンスターが沢山いる、

建物からは出られない、

てとこかな。」

「出られないのは何故？」

「たぶん、非常用の結界だと思う。さっきそれっぽいこと言われたから。」

ペネンリックスは今日のこれまでの出来事を振り返ってみた。朝、術師会館にいくとアビリティ持ちのための受付があった。新年を祝う祭りの日にアビリティは授けられる。その登録のために国内の授かったものがここにくる。この時期必ず行われるため専用の受付があるそうだ。登録すると、ある1室に通された。そこに新しいアビリティ持ちが集められた。今日は3人らしい。残りの2人は女性で1人がマリアさんだった。もう一人は何と言ったかな？まず3人のアビリティの簡易検査と自己申告があった。ペネンリックスは”耐久力”と呼ばれるものの可能性が高いらしい。マリアさんは衝撃

波を見せて、もう一人は

鳩を召喚してた。その後午前中はアビリティのレクチャー、午後から精密調査とテスト使用のため実験棟に移動した。男女に別れてしばらくしてマリアさんが1人こちらの部屋に飛び込んで来た…後ろにモンスターが沢山ついて来たが。

それから、自分を担当していた紋様術師と3人で逃げ回っていたがその人とははぐれてしまった。たぶんその人が外に出て非常用の結界を発動させたのだと思う。

で、現在に至るといわけだ。

「ヤバイ、何かくるわ！」

どうやら考え事をする時間もないらしいです…とほほ。

術師会館での災難（1）（後書き）

入力中、iphoneが固まってしまいびっくり。念のためデータ
コピーした後だったからよかった…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3415y/>

冒険者の心得その2耐えるべし！

2011年11月10日07時17分発行